

「未来の年表」を考える

梅津順一

一 はじめに

本日は聖学院大学創立三〇周年を記念する講演会にお招きを受け、大変光栄に思っております。実はその三〇年の内、私も一〇年ほど一緒に過ごす機会がありましたので、当時を懐かしく思い起こしております。久しぶりにキャンパスにお邪魔して気が付きますことは、木々が成長していることです。木々の成長は聖学院大学の成長を象徴しております。創立三〇周年を心よりお祝いしたいと存じます。創立三〇周年といえますと、聖学院大学は比較的新しい大学、若い大学ですが、学校法人聖学院としてみますと、一九〇三年の聖学院神学校の設立から数えて、一一五年の歴史があります。さらにその聖学院を建てたディサイプルス派の日本伝道が始まったのは、明治二六年、一八八三年ですから、そこから数えますと今年は一三五年になります。日本のキリスト教学校の多くは、幕末の開国以後、欧米からやって来た宣教師が建てたものです。宣教師の方々は、キリスト教の伝道とともに学校を建てました。キリスト教をよりよく理解するには、よい教育が必要だと考えました。キリスト教の教えを迷信やカル

トのように受け入れるのではなく、聖書を読み、よく理解することが必要だと考えたからです。もちろん、宣教師たちが学校を建てたのには、後継者を養成すること、つまり、神学校を建て、日本人の伝道者を養成する課題がありました。それだけでなく文明の学問を伝え、敬虔な心をもって社会のさまざまな場面で活躍できる人間を育てたいと考えたのです。

聖学院も含めて日本のキリスト教学校の多くは、太平洋を渡ってアメリカからやってきた宣教師が建てたものですが、その宣教師を支えた大勢の人たちがいることを忘れてはなりません。一人の宣教師をアメリカから日本に派遣するには、太平洋を渡る旅費をはじめたくさんの資金が必要でした。その資金はどこから来たかといいますと、アメリカの教会の方々が献金してくださったのです。宣教師を派遣する費用だけではなく、学校を建てるとなれば土地を取得しなければなりません。建物を建てるお金も必要です。そうしたお金全部をアメリカの教会の方々が負担して、日本にキリスト教学校が出来たのです。しかも、献金をして下さったのは、特別にお金に余裕のある方々だけではなくありませんでした。かつてアメリカのキリスト教学校では、学生たちが昼食なり、夕食なりを一食抜いて、そのお金を海外のキリスト教学校のためにと献金が捧げられたそうです。きつと聖学院にもそのような尊い献金が寄せられたことでしょう。皆さんはそのような人々の尊い志によつて建てられた学校で学んでいることを、誇りに思っていただいたいと思います。

一般に、社会の中で学校・大学は、社会の求めに応じて、社会で役に立つ人材を育てる役割があります。それとともに、学校の側が理想を掲げて、よりよい人間を育て、社会をより良くする使命があります。キリスト教学校はとくにこの後者、理想を掲げてよりよい人間を育て、よりよい社会を創ることを使命としています。聖学院のスクールモットーは、「神を仰ぎ、人に仕う」ですが、東洋英和女学院はほぼ同じ意味で「敬神奉仕」を掲げています。

この「神を仰ぎ」あるいは「敬神」は、人間にとつてもつとも大切な、謙虚に神の前に立つ人間の姿勢を表し、続く「人に仕う」「奉仕」は、互いに仕え合う人間の理想的な在り方を示しています。同じように、明治学院は、英語で Do for Others 他者への貢献を掲げ、関東学院は「人になれ、奉仕せよ」を掲げています。ちなみに、青山学院は「地の塩、世の光」という聖句を掲げ、イエス・キリストのみ言葉にしたがって、地の塩、世の光の役割を果たしうる人間を育てたいと願っています。日本にあるキリスト教学校が、そのような役割を果たすことができれば、確かによりよい社会を作り上げることができる。聖学院で学ぶ皆さんには、そのような使命があることも覚えていただきたいと存じます。

二 私 の 学 生 時 代

ところで、急に個人的な話になって恐縮ですが、昨年私は七〇歳になりました。私は一九四七年、昭和二二年の生まれですから、戦後のベビー・ブームの世代で、大きな塊―団塊のように突出して数が多いことから、団塊の世代とも呼ばれています。確か、一学年で二七〇万人ほどいて、それが三年間続きました。私の年から三年間ベビー・ブームが続いて、その三年間であわせて八〇〇万人も生まれています。あなたがたの世代は、一学年で一一〇万人ぐらいですから、団塊世代の数の多さが想像できると思います。私は山形県の田舎町で生まれ育ち、大学入学のために東京に出てきました。そのころの東京の町は若者であふれていました。新宿とか渋谷といった盛り場に出ていくと、どこを向いても同じ世代の若者であふれていました。現在、その世代が七〇歳になったのです。七〇歳になって思い出したのですが、私の母親が七〇歳になったとき、こんな感想を口にしました。「ああ、七〇歳になったか。

七〇歳になってみると七〇年なんてあつという間だ。そう考えれば一〇〇年だつてすぐに来そうだ。」それを聞いて私は、なるほど七〇歳になると、時間はそのように感じられるものかと考えたものでした。

今度は自分が七〇歳になってみて、やはり同じような感想を持ちました。七〇年なんてあつという間、この分では一〇〇年もすぐに来そうだ。一〇〇年といえば、一世紀にあたります。歴史の勉強をしていると、一世紀というのは、いろんな事件が起きて、いろんな変化が起きる長い時間です。それが一人の人生の歩みとして過ぎてみればあつという間、そう考えると、一年一年大切に過ごしていけないと、ただ流されてしまいます。若い皆さんは、七〇歳になる自分を想像することはあるでしょうか。皆さんが二〇歳だとしますと、五〇年後、二〇六八年の自分です。皆さんが七〇歳になる自分を想像することは、まず、ない。若い皆さんは、高校までのいろんな制約から解放されて、自由を楽しんでいる、今を充実して生きていると思うからです。その青春を謳歌する皆さんに水を差すのは申し訳ないのですが、皆さんもいずれ七〇歳になる時は来るわけです。ですから、皆さんが七〇歳になるときの自分の姿、五〇年後の世界がどのようなものであるかを想像してみることも大切ではないでしょうか。

私が戦後のベビー・ブームの世代であることはお話ししました。戦争が終わって、夫が戦地から帰ってくる、また戦地から生きて帰ってきた若者が結婚する、そうして生まれたのが私たちの世代です。私たちの世代は、日本経済の高度成長を実感して育った世代でもあります。私は高校時代、隣町に汽車、蒸気機関車がひく列車で通っておりました。靴ではなく、下駄ばぎで通学していました。それが高校二年の時、下駄ばぎ禁止になりました。どうも、車の交通量が増えて危険だから高校生には靴を履かせるようにとの方針があつたのです。その同じ時期に、自宅から学校まで、ほとんどの道路が舗装されました。アスファルトで舗装される前の道路は、晴れの日は土ぼこりが舞い、雨の日はぬかるみ、水たまりが出来て、とても不便だったものです。それが原油が大量に輸入され、石油コン

ビナートが出来、原油から一部はガソリンに一部はタールが出来て、そのタールが道路の舗装に使われ、道路の舗装が一気に進んだのです。

日本の産業発展も目覚ましいものがありました。確か、小学生の頃、自転車に発動機をつけて走る、自転車ともバイクともつかないものを見た記憶があります。それを製造した会社がホンダで、その後少しずつ洗練された高性能の二輪車を製造するようになります。そのホンダがイギリスのマン島で行われたオートレースに優勝したニュースに驚いたことがあります。高性能で安いバイクを作ることで輸出がはじまり、またたく間にヨーロッパ市場を席捲するようになりました。その少しあと、イギリス人の書いた経済記事で、この調子でいけば、そのうち日本の自動車輸出も始まるとの予測ができました。そのとき私はそんなことはあり得ないと考えたものです。当時はトヨタの車も日産の車も、欧米の車にはとても太刀打ちできるとは思えなかったからです。ところが、ほどなくして日本の自動車輸出がはじまりました。七〇年代にイギリスに行つたとき、町の中を日産の車が多数走つていたのを見て驚いたものでした。

私の学生時代の印象では、経済成長は物価の上昇として感じられました。私が上京した一九六六年のバスの初乗り運賃は、三〇円とかそれぐらい。それが七〇円にさつと上がつて、ずいぶん憤慨したものです。ちなみに、大学の年間の授業料は国立大学で二二〇〇〇円、私立大学でも一〇万はしなかつたでしょう。私が卒業するときの初任給は四万七千円ぐらいで、それも年々上昇していきました。高度成長期は物価も上がるが給料も上がる時代で、大学の教職員の給料も上げなければならぬので、大学も授業料を上げなければならぬ。それに学生が反対するという形で、学園紛争も激しくなりました。当時の大学は、大学進学希望者に対して大学の定員が少なく、多くの大学が定員よりも多く入学させていた。その結果、学生が教育環境の悪化に不満をもち、大学紛争は激しくなりました。

三 高度成長後の日本

私の大学時代は高度成長の真つただ中でしたが、では、みなさんはどのような時代に生きているのか。これから先、どのような時代を生きていくことになるのか。本日の私の話は、みなさんが将来を展望する、その手がかりをと考えて『未来の年表』を考える』としました。みなさんの前に広がっている未来はどのような世界なのか。日本の高度成長の時代は、一九七三年の石油危機で終わりを告げます。石油危機とは、イスラエルとアラブ諸国との戦争を背景に、石油価格が急激に上がったことです。日本の高度成長は中東からの安い原油に依存していましたが、日本の経済成長もこれで終わりと考えた人もいました。しかし、日本経済はそれでも成長を続けることができました。

たとえば、日本の自動車産業は、省エネルギー技術を開発することで世界をリードすることができました。低燃費のエンジンを開発することや、排ガス規制といって、排気ガスを極力少なくする技術で、世界市場で受け入れられました。高度成長期には毎年一〇パーセント近い成長があつたのですが、その後も、毎年四％ほど成長があつたのです。この時期は安定成長期と呼ばれています。その結果、一九八〇年代には、日本経済が世界のナンバーワンとの評価もなされました。しかし、日本は貿易黒字国となり、急激な円高となつたこともあつて、バブル経済が発生し、そのバブルがはじけるとともに、日本経済は長期の低迷期にはいります。すなわち、一九九一年以後の日本経済はせいぜい一パーセントほどの経済成長、ほぼ横ばいの状態になつてしまつたのです。

それ以降の日本経済は、失われた二十年とか三十年とか言われますが、あなたがたはその時期に生まれ育つたの

です。経済成長が低迷したこの時期は物価も変わりませんから、見方によれば安定した時期かも知れません。しかし、その期間に大きな変化が起こつてもいたのです。たとえば、この時期に、第三次産業革命が始まつたという見方があります。最初の産業革命は、一八世紀後半にイギリスで起こり、ジェームズ・ワットによる蒸気機関の発明が社会を変える大きな原動力となりました。一八七〇年代にはじまる内燃機関、電気モーターの開発は、第二次産業革命をもたらしました。ガソリン・エンジンや電気モーターは、自動車や飛行機から、家庭電化製品などさまざまなものに応用されて、社会を大きく変貌させました。日本の高度成長を支えたのは、この第二次産業革命を上手に製品開発につなげたものでした。

これに対して、一九九〇年ころから、アメリカで第三次産業革命が始まつたと言われます。情報革命とも呼ばれる動きです。これはとくに、パソコン、パーソナルコンピュータが普及し、それにともなつて、インターネット、すなわち電子的な情報網が作り上げられていきました。その結果、アマゾンとか楽天といったサービスマネジメントが生まれただけでなく、その情報技術がさまざまな分野に普及していきました。この第三次産業革命はいまも進行中ですが、未来予測として二〇三〇年頃より、第四次産業革命が起こるといわれています。いま話題の AI 人工知能がさまざまな分野で応用されて社会を大きく変える時期が来ると予測されているわけです。そうした AI の普及が、人々の職業に大きな影響を与えることが予測されています。みなさんは、第三次産業革命の進行する時代に育ち、この第四次産業革命が始まる時代を生き抜いていくことになるのです。

四 少子高齢化と「未来の年表」

たしかに、この AI がさまざまな分野に普及し、第四次産業革命が出現することは、大きな問題ですが、今日私が考えて見たいことは、やはり確実にやってくる日本社会の少子高齢化です。実は、少子化、高齢化は、実際に進行中ですし、第四次産業革命よりもっと確実に予測できることです。第四次産業革命がどのようなものになるのか、たとえば、自動車の自動運転が普及するとして、タクシーの運転士とか宅配便の運転士の仕事がどうなるかは、よくわからない面があります。宅配便の配達をロボットがやるようになるかは、確実に予測できません。しかし、社会の少子高齢化は、確実に進みます。すでに起こったこれまで少子化によつて、これまで経験したことのない高齢社会が生まれることは、確実に予測できるのです。若い人の数が少ないからといって、すぐに補充できるわけではありません。海外から移民を受け入れる選択はありますが、少子化の流れが変わるには、若いカップルが沢山でき、赤ちゃんが沢山生まれ、成長する、そのような長い時間が必要なのです。

日本社会の少子化とは、簡単に言えば、生まれてくる子供の数が少なくなることです。どのぐらい少なくなっているのか、皆さんご存知でしょうか。すでにお話ししましたように、私が生まれた年、一九四七年、昭和二二年から三年間に、目立っておおく赤ちゃんが生まれました。一年で二七〇万人近く、それが三年間続きましたので、合計八〇〇万人ほどが生まれています。その後、団塊の世代が結婚し子供を産むようになって、第二次ベビー・ブームが起きます。一九七四年がピークでその年二一〇万人近い赤ちゃんが生まれています。しかし、それからは右肩下がりです、毎年毎年、生まれてくる赤ちゃんの数が減っています。皆さんの年代は、一一〇万人ぐらいですが、そ

の後もさらに減って昨年、はじめて一〇〇万人を割り込みました。

年々生まれてくる赤ちゃんの数が少なくなっても、総人口はすぐには減らなかつたのですが、近年ようやく日本の総人口が減少しはじめました。これまでずっと増加しつづつあつた日本の人口が、二〇一〇年の約一二八〇〇万人をピークとして、減少に転じたのです。今のところ、日本の総人口の減少は、数からいえば驚くほどの数字ではありません。しかし、この傾向が五〇年、一〇〇年続くと、劇的な変化となります。研究機関の予測によりますと、二〇六五年、みなさんが職業からリタイアするころには、八八〇〇万ほどになり、いまから一〇〇年後には、五〇〇〇万ほど、ですから現在の人口の半分以下になると予想されています。単純に人口が減るだけではありません。人口に占める高齢者の割合が増加していきます。私が学生だった高度成長期は、どこも若者であふれていたといいましたが、どこも高齢者であふれる社会になっていくのです。二〇二四年といえば、今からで六年後です。その六年後は団塊の世代全員が七五歳以上となる年です。そうしますと、人口の三分の一が六五歳以上の高齢者、六分の一が七五歳以上という高齢社会になります。ちなみに、その一年に亡くなる人が一五〇万人をこえて、その年に生まれる赤ちゃんの倍以上になるのです。

その少子高齢化で、今後どのような問題が発生するのか。今日の表題『未来の年表』というのは、実は少子高齢化で日本に起きるさまざまな問題を指摘してベストセラーになった河合雅司さんの本から取りました。若者が減ること、若年労働者が不足していくことは、目に見えています。それだけでなく、空き家が増えていく。家を継承する人がいなくなれば、空き家になる。確かに、自分の身近な例で考えても、納得できます。私は三〇年ほど前、当時ニュータウンと呼ばれた地域に一戸建てを購入しましたが、いまその住民たちは退職し高齢化しています。子供たちは自分が育った家から自分の就職先に通うことはありません。としますと、住民の高齢化とともに老人の

町となり、いずれは空き家が増えていくかも知れません。

首都圏周辺のかつてのニュータウンでさえそうですから、全国的に見て過疎地はもつと深刻で、地域別の人口推計によりますと、二〇四〇年までに人口の四〇パーセント以上減少する自治体が二二パーセントあるそうです。青森県、秋田県は三〇パーセント以上減る。それだけ人口が減るのでは、自治体の運営に支障が出る。人口が三〇パーセント減少すれば、その地域はいまの形では維持できない。いわゆる「地方消滅」が起きるというわけです。では、首都圏は大丈夫かといえそうですが、大都市では高齢者向けの医療、介護が追い付かなくなることが懸念されています。

高度成長期に若い世代を大量に受け入れた東京をはじめとする大都市は、その世代が高齢化するにつれて、入院患者の数が激増する。人口の割合に比べて、東京は病院のベッドの数も、介護施設も、介護の人材も不足して来るのです。二〇四五年になると、東京も三人に一人は高齢者になる。高齢者の増大に伴い起こってくるのは、認知症患者の増大です。団塊世代すべてが七五歳以上となる二〇二五年には、七三〇万人となり、二〇六〇年には、一〇〇〇万人を超える。若い皆さんにお話しする話としては、暗い話で恐縮ですが、現実に日本社会がそのような姿になっていくのです。

五 少子化の背景

では、少子化はどのような理由から進んだのでしょうか。現実に行進しつつあるのでしょうか。大まかに言うて二つ理由があります。一つは、結婚する人が少なくなつて、その分子どもの数が少なくなつたことです。もう一

つは、結婚しても、その家庭で生まれる子どもの数が少なくなったことです。

戦争直後の日本は、子どもがたくさん生まれ、ベビー・ブームとなったことは繰り返してお話しました。兵隊さんとして戦争に駆り出されていた男たちが帰ってきて、夫婦生活が再開された、また、兵役のために結婚を遅らせていた若者が結婚して、子どもがたくさん生まれたわけです。戦争を生き延びた人は、みんなが結婚したかったし、また結婚した家庭には三人、四人ぐらいの子どもが生まれました。その頃はむしろあまりたくさん産まないように、それでなくとも食料が足りず、苦しい生活が続くのだから、あまり子どもの数を増やさないようにとの政策がありました。

その後、戦争の傷跡から回復し、一九五五年、昭和三〇年ころより、経済成長が始まります。それから二〇年近く続く高度成長の時代は、生まれてくる子どもの数は安定していました。男は二七歳ごろ、女は二四歳ごろに結婚する。夫は仕事、妻は家庭を守って安定した生活を築く。その家庭には、二・三人の子どもが生まれる。そうした家庭の姿が見られたのです。この時期までは、出生率が少なくて人口が減少していく心配はありませんでした。それが、一九七三年石油危機をきっかけに、高度成長の時代が終わり、安定成長の時代に入りますと、出生率、子どもの生まれる割合が少しずつ低下していきます。男女ともに結婚年齢が上がる、つまり晩婚化が進む、それだけではなく、結婚に至らない人の数も少しずつ増えていったのです。

高度成長期には、大まかに言って男は二七歳、女は二四歳で結婚したといいました。結婚、厳密には初婚年齢ですが、安定成長期から次第に上昇して、現在では男は三一・一歳、女は二九・四歳になっています。これは平均ですから、もちろんそれよりも高い人も低い人もいます。晩婚化すればその家庭で生まれる赤ちゃんの数は少なくなります。また、最近では一生結婚しない人も増えています。生涯未婚率という言葉があります。これは五〇歳になっ

でも、一度も結婚していない人をいいます。五〇歳になっても結婚しないのであれば、一生結婚しないという予測の許に、生涯未婚者の数を出してその比率を求めるわけですが、この生涯未婚率、一生結婚しない人の割合が高くなっているのです。高度成長期までは、生涯未婚率、五〇歳まで一度も結婚しない人はほとんどいませんでした。一九七五年の時点で、男は二・一パーセント、女は四・三パーセントでした。それが安定成長期を過ぎるぐらいから少しずつ増えて、二〇一五年の時点で、男は二・三・四パーセント、女は一四・一パーセントにまで上昇しています。これは二〇一五年の時点で五〇歳になった人の数字です。ですから、いま三〇歳の人があっても未婚である確率はもつと高くなります。研究機関の予測では、二〇三五年すなわちその時点で五〇歳になる人、ですから現在三〇代半ばの人は、男が約三割、女が約二割が生涯未婚となると予測されています。

では、なぜ結婚に踏み切る人が少なくなつたのでしょうか。結婚についての意識調査をすると、自分は結婚したくないという人が多くなつていくわけではありません。未婚者について質問すると、自分はいずれ結婚したいと答えています。しかし、現実には結婚には至らない人が増えているわけです。その結婚しない理由、結婚できない理由は、ある程度経済的に説明できます。一つは、結婚生活に対する期待があつて、それが満たされないと結婚したくないというものです。戦後のベビー・ブームのころを考えて見ましょう。日本全体が敗戦によつて何もない状態になりました。戦争から帰つて来た兵士たちは、結婚の条件としてあれこれ注文付けることはなかつた。生きて帰つて来れた、結婚出来るだけで十分幸せだった。結婚出来て、家庭を築き子どもに恵まれる、それだけで満足だったのです。

安定成長期に入つて、晩婚化が始まる、結婚年齢が高まつたといいましたが、その若者たちは実は、戦後ベビー・ブーム世代の子どもたちです。戦後の団塊世代は、高度成長時代に成長し、田舎育ちの多くの若者は大都会

にでて、高度成長を遂げる企業に就職、大都市郊外にマイホームを構えました。高度成長とともに忙しく働き、経済的豊かさを実感することができました。その家庭で育った第二次ベビー・ブームの世代は、結婚に対する期待が高くなつてなかなか結婚出来ないとされています。この世代は、郊外の一戸建てや団地で育ち、自分の部屋を与えられている。その部屋にはオーディオ設備があり、音楽に興味を持ち、冬になればスキーに出かけるなど、レジャーも楽しむことが出来て、恵まれて育った人たちです。

この世代の人たちは、都会では就職しても親と同居する場合が少なくないらしい。としますと、しばらく前に独身貴族と呼ばれたように、自分の収入よりもはるかに豊かな生活を営むことができます。つまり、親と同居すれば、住居費とか光熱費、水道代がかからないし、食費だつて親が出してくれるかもしれない。としますと、自分の給料をまるまる自分の趣味に充てることが出来ることになります。高級な趣味のものを買ったり、有名な演奏家のコンサートに出かけたり、海外旅行に出る。こうした人たちを、ある研究者はパラサイトシングルと呼びました。パラサイトというのは寄生虫、シングルというのは独身者の意味で、つまり親に寄生して生活している人。このパラサイトシングルは、結婚してしまうと余裕がなくなるので、結婚したいとは思わないというわけです。確かに、この第二次ベビー・ブームの世代は、第三次ベビー・ブームをもたらすことはありませんでした。それだけ結婚する人が少なくなつたことを意味しています。

より深刻な問題として、パラサイトシングルの中には、独身貴族とはいえない、親に寄生しないと生きていけない人も出てきました。それは安定成長以後、経済成長が止まり、非正規雇用が広がり、職業が不安定になつてきたことが背景にあります。高度成長期には男は仕事、女は家庭という分業が一般的でした。ところが非正規雇用では、男一人の収入では一家を養うことが出来ず、男女ともに働かなくては家庭を維持出来ない。としますと、結婚に踏

み切ることが難しい若者が増えているわけです。第三次産業革命とともに進んだこの所得格差、賃金格差は、今後もつと進むことが予想されますので、いつそう結婚できない若者が増えていくことが心配なのです。

日本国憲法に生存権という考え方があります。そこには「人として最低限の文化的で健康が生活をする権利」が保証され、そのための福祉政策が求められています。しかし、人として最低限の生活には結婚し、子育てする権利が含まれていないのでしょうか。このままでは三割とか、二割の人が結婚に無縁に生きていくことになります。現代は豊かな社会と言いますが、よく見れば結婚を期待できない若者がこんなにも増えている現状があるのです。それは若者だけの問題ではなく、日本社会の少子高齢化をもたらし、地方消滅をもたらすだけでなく、さまざまな社会不安をひき起すのです。

六 キリスト教と家庭

私は大学教師として学生に接するとき、この若者たちは近い将来二つの重要な課題を解決しなければならぬ人たちだと意識してきました。一つは、就職で、もう一つは結婚です。どんな職業に就くか、どんな会社に就職するかは、その人の人生に大きな影響を及ぼします。さらに、もう一つは結婚で、どのような人と結婚するか、これもその人の人生に運命的な影響を及ぼします。大学教師として私は、自分の担当する学問の教育とともに、就職についてのアドバイスは、折に触れてしてきました。エントリーシートの書き方とか、面接の心構え、職業や会社の選び方。私自身はビジネスの経験はありませんが、社会人としてごく常識的なことはアドバイスするようにしてきました。しかし、もう一つの結婚の方は自分の役割はないと考えてきました。結婚の前段階は恋愛です。かつては見

合い結婚がありました。最近では本人同士の付き合いの中から自分で考えて決めるのが普通です。大学教師が学生の結婚について何か言えることはありません。何かいうとセクハラにもなりかねません。

現代の日本は、結婚に踏み切らない、あるいは結婚に踏み切れない若者が多くなり、未婚の比率が上がり、少子化が進んでいる。これに対する政府の政策は、主として結婚した若者たちが子育てをよりよく出来るように環境を整えることに向けられています。保育所を増やすとか、若い母親の仕事の仕方を子育てが出来るようにするとか、子どもの教育費の負担を軽くする政策です。すなわち、結婚した夫婦に、子どもの数を増やしてもらおう施策です。それに、経済格差によつて所得の低い若者たち、正規雇用が得られなくて、不安定な状況に置かれている若者たちへの対応もなされるでしょう。しかし、そこでは何かが足りない。結婚の意義、家庭生活の意義、子育ての意義を肯定し、積極的に取り組む考え方が必要ではないのか。つまり、結婚して経済的に不自由になつても、独身貴族でいらなくなつても、結婚する方がよい。貧しくとも、二人で支え合つて生きていくことが大事だ、そのような結婚、家庭、子育ての考え方が必要ではないでしょうか。それは家庭生活それ自身を大切な人生の課題とすることです。

明治以後、キリスト教は結婚や家庭について、新しい考え方を日本にもたらしました。日本では江戸時代以来、武家を中心に家の存続、発展という考え方がありました。ここでは、祖父から父、父から息子という縦の関係が継続して家が維持されるのが重視され、妻は夫のために跡継ぎを生むことがもつとも重要な役割とされました。そこで子無きは去る、結婚して子どもが出来ない場合は、離縁されても文句は言えないとされました。嫁選びの基準も、家風にあつて、家風に従う嫁が最重要でした。そこで女の一生は三従、三つの服従から成り立っていると言われていました。子としては親に従い、結婚しては夫に従い、老いては子に従う。したがって、夫と妻との愛情の結

びつきは軽視され、夫が妻以外の女性と関係を持つこともさして悪いこととは考えられていませんでした。大名などは、十名を超える女性を抱えて置くこともありました。

これに対してキリスト教は、男女の愛情を基本とする「清らかな家庭」を提唱しました。キリスト教は女性の立場を守り、尊重しました。それゆえに、キリスト教を求める女性が多くなりました。キリスト教学校が女子教育に力を入れたこともありましたが、家で恵まれない立場に立つ女性を教会が支えた側面もありました。キリスト教会の外でも、キリスト教国アメリカの家庭の姿は、テレビのホームドラマや、「大草原の小さな家」に描かれた開拓農民の家庭を通して、日本人に感銘を与えています。日本の家庭では、結婚式、お誕生日とか、母の日、クリスマスなど、家庭にかかわるお祝い事には、キリスト教の影響が見られます。としますと、家庭の危機にあつて、意欲的に「清らかな家庭」の形成に取り組む若者を育成することが、キリスト教の役割、キリスト教学校の役割といえるのではないのでしょうか。

しばらく前に、ある女子学生と話していたら、彼女が言うには、私はこれからの自分のキャリアについていろいろ考えることがあるが、結婚については何も考えていないと発言したのを耳にしたことがあります。彼女にとって、人生の大問題は九割がた職業生活に関するところで、結婚ないし家庭の問題は一割にも満たないというのです。それでよいのか。そうであれば、その人にとって結婚も家庭も縁遠いものとなるのではないか。これでは少子化がますます進むことはないか。以前は、こんな言い方がありました。「男は自分が結婚したいと思つた時が適齢期、女は周りの人が結婚を勧めてくれる時が適齢期」つまり、男であれば、職業生活で安定することに主力を注いで、これで結婚できると思つて結婚すればよい。女であれば、結婚を申し込まれる、その時を大事にして、結婚の準備をしておかなければならない、というわけです。

若いころ、この言葉を聞いたとき、私は知恵の言葉として受け取りました。しかし、今この考え方は、男女差別といわれるかも知れません。つまり、男子学生が彼女と同じこと、「私はこれからの自分のキャリアについていろいろ考えることがあるが、結婚については何も考えていない」と発言したとして、それは一般に当然だと受け取られるでしょう。男子はまず、自己の経済的基盤を確かなものにするのが重要だからです。女子もそのような考えでいけない理由はないかもしれない。私が女子学生の発言に驚いたのは、私が男女差別の古い考え方からなのであるか。現代では、男も女も、まずは自分の職業上の実績を上げて、経済的基盤を確かなものとするのが求められているからです。としますと男女の共働きを前提にして、家庭を築くことが求められているともいえます。

しかし、よりよい職業生活を送ること、よりよい職業生活の喜びの方は、わかりやすいのに対して、よりよい家庭を築く方法、さらにはよりよい家庭の喜びの方は、イメージがわきにくいものです。もちろん、職業生活についても、下積みの仕事があり、さまざまな苦労がありますが、必ず収入という明確な報酬があります。それに対して、結婚して子供を育てるとなりますと、とくに女性の側は、家事に加えて、出産、育児と多大の労力が待っています。子育ては、一つ間違えば、子どもの命に関わりますから、緊張が求められます。その労苦にお金に換算した報酬が得られるわけではありません。夫婦がともに労苦し、家事をやりくりし、子育てに奮闘する、そこで何が得られるのかと思ってしまう人もいるかも知れません。しかし、家庭の中で、家庭生活のなかでしか得られない貴重なものがあることも事実なのです。

以前こんなことを聞いたことがあります。第二次世界大戦の日本軍の作戦のなかで、インパール作戦はもつとも無謀な作戦として知られています。インパールというのはインドの都市の名前で、当時そこにイギリス軍の拠点がありました。東南アジアに進出した日本軍は、中国軍を支援するイギリス軍に対して、陸路ビルマ（ミャンマー）

からインパール攻撃を加える作戦でした。その作戦は失敗し、日本兵はほうほうの体で帰ったのですが、途中で息絶える者が続出、その道は白骨街道となったのでした。では、その過酷な状況の中で生き延びたのは、体力のある若い兵士かといえばそうではなく、故郷に妻子を残した中年の兵士だったそうです。家族を持つ者の責任感でもあります。遠くの家族の声が兵士を励まし、生き延びさせたともいえるでしょう。家族にはそのような力があるのです。

七 おわりに

本日は、七〇歳になった私からみなさんのこれからの五〇年、みなさんが七〇歳になるまでの時代で起こる問題についてお話ししました。職業上については、人工知能の普及がさまざまな職業の在り方に大きく変化させることが予測されていますが、今回私が取り上げたことは日本社会の少子高齢化でした。ベストセラー『未来の年表』は、地方社会の消滅や社会インフラの崩壊、社会福祉の行き詰まりなど、深刻な問題を予測しています。その少子化の原因はといえば、一つには、若者たちが結婚への期待を上げて、結婚に踏み切るハードルを高くしていることであり、もう一つには、若者の間に非正規雇用が広がり、一家を養うだけの所得が得られないこと、結婚生活の基盤が揺らいでいることでした。私はこれに加えて、若者の間で、結婚生活、家庭生活、子育てに積極的に取り組む姿勢が弱まっていることを問題としました。結婚生活、家庭生活は、損得勘定では営めないところがあります。若者自身の生き方としても、社会全体の考え方としても、家庭生活を大切にすること、とくにこれから結婚し、家庭を営み、子どもを育てる若者たちが積極的に家庭生活に入ることを応援することが必要と考えるからです。

日本社会のなかで比較的受け入れられているキリスト教の習慣として、キリスト教の結婚式があります。六割か

七割の若者がキリスト教式の結婚式を望んでいます。キリスト教式の結婚式では、次のような誓約の言葉、約束の言葉があります。新郎、なににさん、あなたはこの新婦なににさんを、愛することを誓いますか、健やかな時も病める時も、富めるときも、貧しき時も、順調な時も、困難な時も、死が二人を分かつ時まで愛し合うことを誓いますか。その問いにはい誓いますと約束することで、結婚が成立します。これは、お互いがお互いに誓うのではなく、神に誓うのです。人間同士の約束なら、あいまいにされてしまうことがあります。しかし、神様への約束であれば、その約束の言葉は厳粛です。キリスト教では、結婚はそうした神様への約束によつて支えられると考えられているのです。キリスト教学校で学ぶ皆さんは、よりよき夫婦関係、よりよき家庭を築いていく基礎をよく理解できるといえるでしょう。

キリスト教学校は、理想を掲げてよい人間を育て、社会をよくする使命があると申しました。今日の状況でいえば、良い家庭をつくり、良い社会をつくる使命があると言えるのではないのでしょうか。自由な競争が経済的繁栄をもたらすと、もて囃されている現代では、結婚や家庭も経済的な論理でとらえられがちです。結婚相手を見つけるのも、自由な競争、自由な取引ととらえられ、自信のない若者はそこに出ていけないともいわれています。あるいは、結婚紹介業者のなかには、結婚相手を探すアプリ、人工知能の判断を提供するものもあるそうです。しかし、結婚生活、家庭生活では、経済的な取引というギブ・アンド・テイクでは、うまくいかない。家庭内の仕事の分担も、ギブ・アンド・テイクで、公平に求め合い、与え合うことができればうまくいきそうですが、それでもありません。家庭内では、その公平の基準自体が、明確ではないからです。家庭内でこそ、お互いに仕えあうことが必要です。

聖学院のスクールモットーにあるように、「神を仰ぎ人に仕う」、これが人間の生き方として真実であることを

知ることができものが家庭ではないでしょうか。とはいえ、私共の家庭はともに仕え合う理想の家庭ですとは、なかなかいえるものではありません。しかし、だから希望がないわけでもありません。結婚式の場面的に、夫婦の間に神が立ち、二人の関係を取り成し、導いてくださる。そこに結婚関係を、家庭関係を永続させる力があるのです。それは神に対する約束が厳肅だからというだけでなく、実は、神様がその約束を確かなものとすることができるように、執り成してくださるからです。つまり、その約束を十分には果たせない人間を果たすことができるように、力を与えてくださるのです。そのことを学ぶことができるのも、キリスト教学校、聖学院だからではないでしょうか。現代日本の少子高齢化の進展は、家庭の危機が、社会の危機であることを端的に示しています。その危機の克服には、信仰の危機の問題があるともいえます。皆さんが七〇歳を迎えるとき、皆さん一人一人はどのように生活しているのか、日本や世界には、どのような光景が広がっているのか。本日の私の話を一つのヒントとしていただければ幸いです。

(二〇一八年一〇月一七日、聖学院大学創立三〇周年記念講演会)